

## 延岡ばんば踊りに関する一考察

渡邊 博史

### 1. はじめに

ばんば踊りは延岡を代表する地域文化資産のひとつである。しかし、この踊りは戦後しだいに廃れ、現在、その姿を地域の中にもみることが極めて少なくなった。

こうした事情もあり、今日、「ばんば」といえば一般的に新ばんば踊りをイメージするが、新ばんば踊りは、昭和37年に新しい時代の盆踊りとして、ばんば音頭の節を基本に作曲された新民謡で、踊りも日本フォークダンス連盟の指導により振付されたものである。

この新ばんば踊りが創作されて間もない昭和38年2月刊行の『延岡市史』に、新ばんば踊りの紹介とともにばんば踊りについて、次のような記載がある。「最初は盆踊りであったが、旧藩政時代に藩主が豊作を祈って馬場に農民を集めてこの盆踊りを踊ったので、馬場踊りといい、さらにばんば踊りに転訛したものといわれている。」

このいわゆる馬場踊り起源説は「ばんば」の語源として未だに広く定着している。

これを疑問視したのが、宮崎県北地方の民俗を広く調査した秋山榮雄である。秋山は沢武人<sup>1)</sup>が高千穂のばんば踊りを考察した結果、馬場踊りとするのを疑問としたこと、さらに、松岡謙一郎の大分地方のばんば踊りに関する見解などを挙げ、馬場踊り起源説を誤りとした上で、県北地方でばんば踊りといわれる伝統行事はまだ調べねばならぬことが多いと投げかけた。<sup>2)</sup>

延岡市文化財保護審議会委員であった年森偵泰もその一人である。実は「ばんば」の語源を最初に「馬場」としたのは年森であった。しかし、その後、「ばんば」の名称について、宮崎県北から大分県南部の宇目、佐伯地方さらに延岡歴代藩主の前封地にも手掛りを求めたが得るものはなく、大分院内地方で盆踊りの際、その由来を読み上げる祭文に万人供養のため「バンババンバト躍ラセ給フ」とあることから、盆踊りをばんば踊りというのは自然なこととして、その語源についてさらにいくつかの試みを行った。

そして、その結果、結論は出なかったが、馬場の発音バンバをその由来のなかに考えるという一説の論断は、今一度考えて見る必要があると自説を修正している。<sup>3)</sup>

また、柴田晋一は昭和54年の延岡市文化財保護審議会の中で、『旧ばんば団七踊り考』<sup>4)</sup>を執筆中、朝日新聞津山支局から「岡山にもバンバという踊りがあるが、その意味が不明であり、糸口となるものが延岡にないか」との手紙を受けたが、双方の踊りがあまりにも異なることから回答に窮し、以後、馬場踊り説に疑問をもったと述べた。

しかしながら、彼らが発した疑問はあまり顧みられることなく、その後、目立った調査や研究も行われないまま今日に至っている。

こうした中で『延岡市民俗芸能調査報告書』<sup>5)</sup>は「ばんば」の語源について、はっきりとしないと断った上で、次のような仮説があると述べている。

- (1) 馬場踊りといい、馬場のことを「ばんば」というので、ばんば踊りとなった。
- (2) 東海港から入ってきた播州踊りが訛ってばんば踊りになった。
- (3) 九州東部では激しいことを「バンバン」といい、激しい踊りということでばんば踊りと呼ばれていた。

さらに、この報告書は上記に関連し、(1) 延岡ではばんば踊りを「へよご（兵庫）」あるいは「兵庫踊り」と呼ぶ地域がある。(2) 盆踊りには雨乞いの要素も含まれる。(3) 大分地方には、延岡でいわれているような通説が見られない、といったことにも触れ、踊りの発生時期については、いま一つ決め手がないとしながらも、念仏踊りから発展し、音頭に歌舞伎、浄瑠璃の内容が盛り込まれていることから、盛んになったのは江戸後期と推察できるとしている。

延岡市教育委員会がまとめたこの報告書のばんば踊りに関する記載は、これまでの見解を一通り網羅した唯一のものといえようが、秋山らが投げかけた疑問や不明な点は残されたままとなっている。本稿はこうした問題も踏まえ、延岡のばんば踊りについて考察を試みたものである。

## 2. 口説・曲節

ばんば踊りの唄は「鐘が鳴る鳴る 城山の鐘が あれは三百年 時打つ鐘よ」の歌詞で知られる新ばんば音頭とは異なり口説節である。口説節とは七・七・七・七あるいは七・五・七・五調の物語唄で、和讃や御詠歌から発生したと考えられている。

口説節は、室町から江戸初期にかけては念仏踊り系の伊勢踊りに用いられ、江戸後期には鈴木主水や八百屋お七などが外題として取り上げられて全国的に流行した。

ばんば踊りの口説には、この鈴木主水や八百屋お七をはじめ大黒天、白瀧姫、牡丹長者、炭焼小五郎などの「祝い物」、お塩亀松、八鬼山峠、石堂丸など「供養物」、お為伴蔵、梅治小藤、お半長右衛門といった「心中物」、「世話物」には関取千両幟、阿漕ヶ浦、また、「段物」として平井権八、源平一の谷合戦記、奥州仙台白石噺、小栗判官、石山お艶といった外題がある。

ばんば踊りの口説は、音頭取りの演唱に踊り手や太鼓打ちが囃子を唱和する形を取り、曲節は基本的に「唄文」、「チョンガリ節」、「流し節」、「送り節」、「切り」、「片送り節」、「投げ節」、「馬子唄」、「片落とし節」の九つの節で構成される。

「唄文」は節回しの基本となるもので、本調子で歌い出し後半を切り止める。本調子とは一の糸に対し、二の糸を完全4度高く、三の糸を1オクターブ高く合わせる三味線の基本的な調弦法のこと、これで演奏される調子のことをいう。荘重、古風な雰囲気を表すのに適しているといわれ、浄瑠璃はこの調弦を基本とする。唄文は新ばんば音頭にも採用され、冒頭の「鐘が鳴る鳴る 城山の鐘が」がこの節で唄われる。

「チョンガリ節」は八木節などに使用される節で、江戸中期に流行り、僧行たちが鉦や太鼓、ほら貝などを伴奏に用い、世相の風刺や地名を巧みに歌い込んだり、数え唄などを軽妙に唄い並べて人々を喜ばせたというものである。ばんば音頭では本調子や送り節に続いて唄われることが多いが、この節で唄い始めることもある。音頭を調子付けるのに効果があり、場合よって繰り返し使用される。

新ばんば音頭では「あれは三百年 時打つ鐘よ 町の歴史を ひそめて響く」、「五ヶ瀬大瀬の 二つの川は 町をよぎりて 川へとそそぐ」といった部分にこの節が採用されている。

「流し節」は木遣り唄や道中唄からきたともいわれる節で、情景などを表現する節付けである。歌詞の末尾を「ア深ウかーきー恵みーィ、、ぞ オホホン オホホン…」、「野オもオ過ウぎヒ、、、」などと整えたりするが、これは「送り節」にもみられる。

「送り節」は浄瑠璃で情景の変わり目や人の出入りに付ける節で、ばんば音頭では「流し節」と同様、情景や状況を表現する役目を持つ。単独構成の曲節であるが「流し」の後に続けると効果が上がる。「送

り節」の後は必ず「切り」となる。「切り」とは小節を区切る節で、新ばんば音頭では「心いとしみ名歌を残す」、「やなの群れ鮎 しぶきを上げる」といったところに使われている。

「投げ節」は江戸時代の流行歌で、明暦から宝永頃（1655－1711）に起こり、主に遊里で好んで唄われた。唄の末尾を投げ出すように唄うことから「投げ節」とよばれるようになったという。これは吉原通いの嫖客が日本堤を歩きながら歌ったことから「土手節」ともよばれる調子の良い節付で、ばんば音頭では囃子言葉から「どっこい節」とも呼ばれている。宮崎県内では木城町比木の盆踊り口説にこの節が使われている。「投げ節」は通常、「チョンガリ節」と同様、前の節に続いて何回か繰り返して、次の節に引き継ぐ。新ばんば音頭では「延岡七万石城下町 昔を偲ぶお城山」、「川には川船屋形船 やなではあゆの川原焼」といったところを「投げ節」で唄う。

「馬子唄」は馬追いが馬をひきながら唄ったもので、ばんば音頭では「唄文」と同様に後半は「切り」となる。大黒天はこの節で唄い始める。

「方送り節」は前半分を「送り節」で唄い、次の節に移るもので、「片落とし節」は「送り節」で小節の前半を唄い、後半を「切り」で止める節付けで稀に使用される。

このほか、浄瑠璃、小唄、甚句なども挿入され、「関取千両幟」、「阿漕が浦」では台詞が頻繁に挿入される。

囃子は唄文、切り、片落とし節は「ありゃーせーのお やーとせー」、唄文のときはほかに「あ、いやこりゃせ」と囃す。また、送り節は「ほいな」、流し節は「あ、よーいとなー よーいとなー」、投げ節は「あ、どっこい」と合いの手を入れる。

太鼓は鉢巻き姿に浴衣、草履履で太鼓に踊りかかるように撥を振り「さい さい」と囃しを入れながら「カッカ ドンカラカッコッカ カッカ ドン カッカ ドン カラカッコッカ」と繰り返して打ち、櫓の上の音頭取りが美声を張り上げる。

### 3. 口説の伝承

こうした複雑な曲節は、戦時中一時途絶えたものの、昭和30年代前半頃までは、師匠に弟子入りするというシステムにより受け継がれていた。このシステムは江戸後期には確立されていたと考えられる。

江戸時代生まれの師匠としては、中川原の荒木寅吉（弘化元年生）が知られている。古式盆踊りの名称でばんば音頭を継承する黒木重代司（昭和5年生）によれば、北川家田に伝わる音頭は、この荒木寅吉から平田徳治（嘉永元年生）に伝わり、徳治から平田八郎（明治2年生）、重代司の祖父虎治（明治5年生）らへ、さらに八郎から黒木千治（明治11年生）へと受け継がれている。黒木重代司は16歳で千治に弟子入りし音頭を習ったという。

徳治は、寅吉には延岡一円に40人ほどの弟子がおり、稽古は正座で厳しいものであったと伝えている。また、徳治は寅吉から免許皆伝の証として「徳」の文字の入った紙製肩衣を授かっている。一人前となった証にこうしたものを贈る風習があったのかもしれない。

音頭取りとして名を馳せた中尾正（明治25年生）は北方町打扇の生まれ、戦後は高千穂通に居住していた人である。『延岡ばんば踊り音頭集』<sup>6)</sup>によれば、中尾は大正9年から大正14年まで南方松山の甲斐専治師匠に弟子入りしたが、師匠は毎日、北方まで来て夕方6時頃から10時頃まで稽古を付けていた。稽古は寅吉と同様正座、音頭は全て口移しであった。

『延岡ばんば音頭集』<sup>7)</sup>を編纂した杉本喜好(大正14年生)は吉田時雄(大正15年生)らとともに、荒木寅吉の流を汲む無鹿の黒木健師匠に師事したが、師匠に対する月謝といったものはなく、盆、暮れに足袋や下駄などを贈る程度であった。杉本は中尾の師匠であった甲斐専治の孫で、父・鐵治(明治11年生)も音頭の名人といわれた人である。音頭は盆踊りだけでなく家普請の基礎工事や河川の護岸工事など共同作業の際にもなくてはならないものであったが、父の時代にはこうした際に声が掛かると二人前の賃金が支払われていたという。

昭和27年3月23日に行われた権藤正行師を囲む座談会の記録<sup>8)</sup>には、明治23年の大瀬橋建設の際、音頭で地固めの縄を引いていたことや音頭取りの声に惚れて嫁になったという話が記されている。盆踊りや共同作業の際、音頭取りは最も注目される花形的存在であった。

#### 4. 踊り

ばんば踊りには手踊り、扇踊りなどがあり、音頭取りと太鼓を中心に輪になり右回りに踊るが、男性は編み笠を被って女装し、女性は男装して粋を競った。これは秋田県毛馬内や石川県輪島など各地の盆踊りにもみられる。盆踊りは仮装の最も身近な機会であり、普段できないことを踊りに託して憂さを晴らし、若い男女にとっては恋の駆け引きの場でもあった。

また、組踊りとして、宮城野(みやぎの)と信夫(しのぶ)の娘二人が父の仇志賀団七を討つという噺を題材に、3人が1組でそれぞれに扮装し、刀、薙刀、鎖鎌を持って踊る「団七踊り」がある(写真1)。



写真1：団七踊り

同様の踊りは名古屋市岩塚、和歌山市岡崎、徳島県穴喰町、愛媛県八幡浜市双岩などにもあるが、浄瑠璃や歌舞伎の影響によるこの白石噺にちなむ諸芸能は全国各地に分布し、佐藤豊淑凰の調査では確認されるだけで25県120ヶ所に及んでいる。<sup>9)</sup>

宮崎県北地方ではこの「団七踊り」がばんば踊りの一演目として取り上げられている。これが密集するのは延岡、高千穂、五ヶ瀬、日之影、諸塚など旧延岡藩領に属する地域である。

延岡では、この踊りの輪の中に「累踊り(かさねおどり)」が加わることがある。累とは娘の名で、夫の与右衛門に殺された累の怨霊が、雨の日に鎌をもって復讐にやってくるという噺を踊りにしたもののである。

この踊りの基となった舞踊は文政6年(1823)「法懸松成田利剣」(けさかけまつなりたのりけん)の二番目序幕として初演されたが、その後、道行き場面の曲だけが残し、振りでは中断していた。しかし、大正9年、六世尾上梅幸の累、十五世市村羽左衛門の与右衛門で復活し大流行した。累踊りはこの時期に団七踊りに組込まれたと考えられる。

「女鎌踊り」とも呼ばれていたこの踊りに口説はなかったようである。男が唐傘、娘が鎌を持って果し合いする形で踊るが、戦前は鎌を持った娘と蛇の目傘を持った浪人、あるいは虚無僧という扮装で



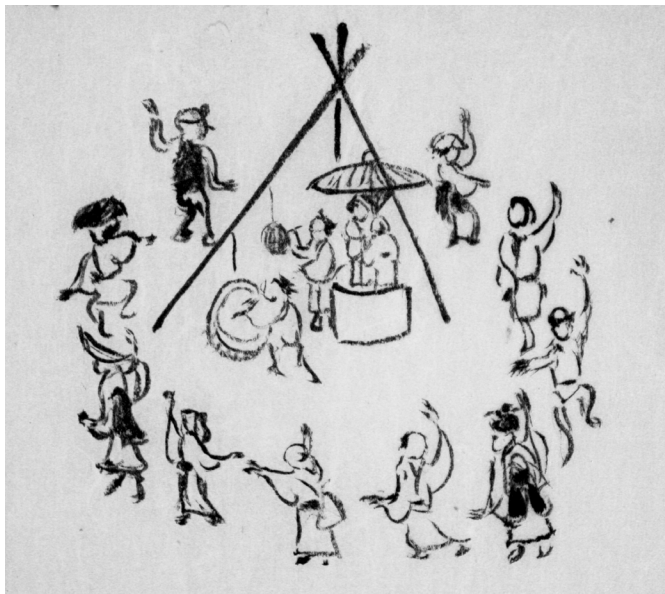
踊られていた。組踊りとしては、ほかに「唐傘踊り」、忠臣蔵の扮装で踊る「四十七士」という演目もあったが廃れている。

内藤家十四代政順の妻充真院繁子の道中記『五十三次ねむりの合いの手』<sup>10)</sup>の文久3年(1863)9月1日の条には、出北の庄屋宅の庭でみたばんば踊りが次のように記されている。「少々御酒遣し候へは百姓共悦て、夫よりばんは(ばんば)をとり致見せんと申故是は珍らしく宜からんいへは、右の三本之ほう(棒)の下につき白をうつむけに置いて其上に兩人歌うたふもの上り笠を指して居、又大きやうなる太鼓を持て来たり其たいこは渡し三尺もあらん程夫をまたほうのわきにつるし一しんに打ち、又わきにかねもつるしドンカ、と大汗にて打つと、いろゝのなりしておとり(踊り)出し段々拍子につれてくるゝとほうの廻りをめくる。百姓乍思い之外しなやかにてよふ手揃、是も遠国へ行しかは見ると申昔絵に有盆おとりにひとし、大方は男はあみかさ杯かふりて女之様にして出、女は男の様に出来面々色々なる事して出る。中にはばゝなそつむりにきせる指て出る。是は下に置くとなくなる故との事也、田舎ばゝというときせるをよくさし候絵有か初て見候」

この日記からも男は編み笠などを被って女装し、女は男のようにして踊っていたことが分る。

念仏踊りや盆踊りの仮装については、伏見宮貞成親王日記『看聞御記』の永享3年(1431)7月16日の条に「今夜即成院念仏躍見物 女中男共相伴異形風流有其興」、また、盆踊り最古の記録とされる『春日権神主師淳記』の明応6年(1497)7月15日の条に「南都中近年盆ノヲドリ、異類異形一興」と記されており、これらの記述からは日常と違った異形風流、異類異形の装いで熱狂する踊りの様子が窺える。

また、挿絵では伴奏に鉦も使われているが、戦前の川島村では太鼓、鉦、三味線が伴奏に使われていた。北川町や延岡市に隣接する東臼杵郡門川町でも太鼓と鉦が使用されていたという(写真2)。



## 5. 芸態の成立

ばんば踊り発生の時期についてはよくわかってはいないが、文政2年(1819)、地元の氏神に奉納されたとの記録がある熊本県高森町峰の宿のばんば踊りは、寛政年間(1789-1801)、日向高千穂方面から伝わったといわれている。高千穂から伝わったとすれば三田井から河内、五ヶ所を通じて峰の宿まで伝わったと考えられるが、これを事実とすれば、ばんば踊りはそれ以前から行われていたことになる。

また、口説と密接な関係を持つ浄瑠璃

写真2：出北のばんば踊り『五十三次ねむりの合いの手』より<sup>20)</sup>や歌舞伎では「義経千本桜」が延享4年(1747)、「一之谷双葉軍記」が宝暦元年(1751)、「関取千両幟」が明和4年(1767)、「傾城阿波の鳴門」が明和5年(1768)、「碁太平記白石噺」は安永9年(1780)の初演。「阿漕が浦」については田村麿鈴鹿合戦の四段目を独立させて、早くは寛政10年(1798)江戸土佐座の上演とされ、享和元年(1801)遊女白糸と情死した「鈴木主水」については幕末に俗謡で流行したも

のである。こうしたことからみて、現在、伝承されるばんば踊りの芸能成立は18世紀後半とするのが妥当である。

## 6. 「ばんば」の語源

踊りの名称である「ばんば」の語源については、江戸時代に馬場で踊られたため、あるいはこの踊りが「ひょうご」とも呼ばれることから、兵庫（播州）の船乗り達から伝わり、播州がばんばに転化したものといわれ、今日、これらが通説のようになってしまっている。

ところが、「ばんば」と呼ばれる踊りは大分県、福岡県行橋市、山口県、岡山県久米郡久米南町、鳥取県米子市、京都府綾部市、福井県おおい町、東京都三宅村にもあって、由来も芸能も異なるこれらの踊りを総体的にみてみると、馬場や播州というキーワードは共通項として成り立たない。

大分県は中世以降、現在に至るまで盆踊りが盛んなところで、地域により芸能は異なるが、一般的に宗教的色彩を色濃く残し、供養踊りという名称が広く使われている。このなかで「ばんば踊り」は湯布院塚原、安心院、院内、別府などに伝承される「庭入り」の行事のなかで行われる踊りである。

庭入りとはもともと新盆の家を踊って廻る行事で、集落の人たちが新盆の家に参り、和賛を唱えたあと最初に男性だけで踊る踊りを「ばんば踊り」という。「ばんば踊り」が終わると、地域によって違いはあるが太鼓に合わせて音頭取りが口説き「まっかせ」、「大津絵」、「レソ」、「二つ拍子」などといった踊りを踊り、最後に男性だけで短い「けだし」という踊りを踊る。

例えば、湯布院塚原の「ばんば踊り」は切り口説で「アエーイエイソリャ ばんば踊りが始まりました。ア爺さん婆さんたちちや寺参り サー寺参り…」と踊り手が唄い継いでいくもので伴奏は一切ない。ばんば踊りが終わると太鼓に合わせて音頭取りが口説き、団扇を持って他の踊りを次々と踊り、最後は傘鉦を先頭に全員で庭を左回りに出て行く。

福岡県行橋の下稗田と長井にも「ばんば踊り」があったことが知られている。この踊りはすでに廃れているようであるが『日本民謡大観』<sup>11)</sup>に記録される下稗田ばんば踊りの歌詞は「ハーヨイショコラショ 何からやろか 私ちよいと出の田舎のもので、何というても何頼りだに 知らぬ口から二口三口 やりちゃみましょか やりかけちゃみろか ここに読み出すあの外題は 古き外題にごさうらえど 鈴木主水とでかけちゃみろか」という七・七・七・七調の口説である。この口上は「ここにとりたてまする外題というは 古きものにはございますが 一の谷へと出かけてみましょ」といった延岡ばんばの口説に通じるものがある。

また、『福岡県の民謡 一民謡緊急調査報告書』<sup>12)</sup>に踊り歌としてその名称が記載される長井のばんば踊り唄は「高い山」とよばれていた甚句調（七・七・七・五調）の艶歌で、明治2年に流行した民謡「高い山」や後藤桃水（1880－1960）の「稲上げ唄」、俗謡の文句などが取り入れられている。おそらくこれは即興的に流行唄などを歌い込んでいたものであろう。

『ふるさと盆口説』<sup>13)</sup>にあるこの「ばんば踊り」の歌詞は次のようなものである。「待つがよいか 別れがよいか いやな別れよ 待つがよい 高い山から 谷そこ見れば うりやなすびの 花ざかり 今夜きなされ かかさんおらぬ ととはつんぼで 目は見えぬ 盆のぼんた餅ちゃ 三日おきやすえる おかかこれ見よ 毛がはえた ゆうべさせたりゃ 今朝まで痛い 二度とさせまい 膝枕 娘したがる 二人の親は させてみたがる しゅすの帯 いらん世話よの 他人の身柄 やいてよければ親がやく 親の意見と 茄子の花は 千に一つの仇もない しょうが婆さんな やき餅好きよ ようべ

九つ 今朝七つ ようべ九つ 夜食でござる 今朝の七つは 朝茶の子 恋し恋しと 鳴くせみよりも 鳴かぬ蛩が 身をこがす 踊るなかにも しなよい子ども さぞや親たちや 嬉しかろう 梅と桜を 両手に持ちて どっちが梅やら 桜やら 今夜ここに寝て 明日の晩は 田圃田の中 畔まくら 今の若い集はいなごかびきか 女さえ見りゃとびかかる」<sup>14)</sup>

行橋には「盆踊り由来口説」、「畑の終りの歌」、「那須与一」、「石童丸（刈萱口説）」、「お染久松」、「お吉清三」、「兄弟心中（お塩亀松）」、「八百屋お七」といった盆踊り口説もあるが、これらと「ばんば踊り」との違いについてはもう少し調べてみたい。

京都府の北西部に位置する綾部市上林谷は、丹波と若狭を結ぶ交通の要衝の地として栄え、山家城、上林城が築かれた地である。ここにも「ばんば踊り」とよばれる盆踊りがあることが『綾部市史』<sup>15)</sup>により確認できる。上林谷には「ばんば踊り」のほか「伊勢音頭踊り」、「丹波踊り」、「みつぼし踊り」、「七文踊り」、「へのか踊り」、「こりゃいとさん」、「角力踊り」、「かごや踊り」、「やっこせ踊り」と10種類の盆踊りがある。ここに伝わるそれぞれの唄や踊りについて市史に記載はないが、このように多種の盆踊りが行われる例は大分地方をはじめ各地にみられる。

福井県おおい町の「ばんば踊り」は佐分利地区に伝承される踊りで、かつてはお盆の時期、集落ごとに広場やお寺の庭で踊られていた。踊りの輪の中で、それぞれが思い思いに甚句調の文句を掛け合うように唄い、踊り衆全員が合の手を入れながら踊る踊りと、七・五・七・五調の口説節で踊るものがある。後者の場合、音頭取りは一節ごとに「エーエ」と唄い出し、踊り衆全員が節の区切りに合の手を入れる。いずれも手踊りで伴奏はない。

掛け合いの踊唄は「踊り躍るならしなよく踊れ しなのよい子を嫁にとる」、「姉と妹はそろいの浴衣 どれが姉やら妹やら」、「親の意見と茄子の花は 千に一つのあだもない」、「色が黒くても浅草海苔は 白いお巻の肌に着く」、「破れふんどしや将棋の駒よ 角と思ったら金がでた」といったように、俗謡の文句などを取り入れながら即興的に歌い継いでいく。

口説は「エーエ チョイト出します はばかりながら(チョコセ) あうかあわぬか知らねども(ハーラ ヨイトサノ ヤートコセ)、エーエ 月にむらくも 花に風(チョコセ) 散りてはかなき世のならい(ハーラ ヨイトサノ チョイトサノ ヤートコセ)、エーエ 咲きにいでにける 山桜(チョコセ) ながめ楽しむ春の空(ハーラ ヨイトサノ チョイトサノ ヤートコセ)、エーエ 汲む盃 ちらちらと(チョコセ) 入り込む花のひとひらに(ハーラ ヨイトサノ チョイトサノ ヤートコセ)、エーエ 加藤左衛門 茂氏は(チョコセ) 娑婆の無常を悟りけり(ハーラ ヨイトサノ チョイトサノ ヤートコセ)、エーエ 国に妻子を振り捨てて(チョコセ) 諸国修行に出で給う(ハーラ ヨイトサノ チョイトサノ ヤートコセ)」といった物語風のものである。佐分利のばんば踊りについては、現在、地区の保存会が年1回大会を開催するなど保存伝承につとめているが、音頭は後継者が少なくなりテープで踊っている。

また、同地区鹿野では、8月15日に火祭り「火勢」の一環として行われる「山おろし」行事の後、仏燈寺の境内で「山おろしの踊り」と「かごや踊り」を踊り、最後に「ばんば踊り」を踊って火勢行事を閉める。

三宅島（東京都三宅村）の「ばんば踊り」は、神着地区に伝わる盆踊りで、閉じ扇を持ち、足はつま先をつけずかかとだけで踊る。歌詞は2番まであり「この寺建てたヤーレ コリャナー 大工めが マッタイナ 下手でヨ ヤーレ 漏りそよ雨がヤーレ 下手じゃ タッキリコッキリ トイ サーイ



サー ドッコイ ドッコイ」とゆっくり静かに唄う。節は5音階からなる都節音階<sup>16)</sup>である。

盆踊りは雨乞い踊りの要素も含まれるが、岡山県久米南町仏教寺に伝わる「バンバ踊り」は、寛永13年（1636）の干ばつの際、津山藩主森長継が仏教寺に祭られる龍神に奉納したといわれる踊りで、請雨のあった年だけに行われる。全員男性で唄い手、太鼓、ほら貝、踊り手により構成され、唄い手は羽織袴、太鼓と踊り手は表が白、裏が赤色の幣（シデ）の垂れ下がった菅笠に白振袖、赤帯、手甲姿で女装し、日の丸の扇子を持って太鼓と音頭に合わせゆっくりとしたテンポで踊る。隊列は輪形で、「道中」、「踊り」、「道中」の三部で構成され、各踊りの間に赤鬼、青鬼による棒術が行われる。

この踊りは、歌舞伎「天鼓」の道行きに唄われた「馬場先踊り」に始まり、それが「バンバ踊り」に転訛したのではないか。あるいは「バンバ」は梵語の雨の意味に通じており、雨乞いとの関係からその名が付いたといわれている。

また、三百数十年前から伝えられるという鳥取県米子市の富士見踊り（米子踊り）は、振りの異なる「たいしょう踊り」、「ごだいじ踊り」、「さいご踊り」からなり、最初に踊る「たいしょう踊り」を「ばんば踊り」という。その語源は馬場あるいは太鼓のバンバンという音からきているといわれ、熊本県高森町峰の宿では、盆の夜、広場に集まって踊ることから、「晩の場」または「盆の場」が「ばんば」になったといわれている。

しかし、こうした「ばんば」の謂れは、いずれも確証のないまま推考されたものに過ぎず、「ばんば」の語源や意味を明らかにするまでには至っていない。盆踊りはもともと仏教行事であり、平安時代に空也上人によって始められたという念仏踊りが源流となって盂蘭盆会の行事と結びつき、精霊を迎え、死者を供養するための行事という意識になっていったようである。このことは、別府市天間の「庭入り」で行われる「シカシカ」などからも窺える。

これは和讃の詠唱に続いて「サンガシラ」という念仏を唱えた後、「シカシカ」という盆踊りの由来を説いた口上書きを読み上げるもので、抜粋すると「当村天間地区物故者無縁供養踊りを執り行い申すここに盂蘭盆経の謂れあり昔釈迦の御弟子目連尊者の御母公 長く病の床に臥し給い 医術を尽くし給えども遂に死去あそばされ 阿鼻地獄落ち給う其の時目連大いに嘆き悲しみ給い 何とぞ母の苦しみ救わんものと高さ九尺に棚を架け 三界万霊の位牌を供え一万部の法華供養とや その功力にや地獄上がりをあそばされ 当月中の五日とや西方彌陀の浄土に御往生あそばされ候 その時目連尊者大きに御喜び給い おのおのかサボコの下に入り 衣の袖を振り立て躍らせ給う その学びをここに当村老若男女集まりて ばんば踊りを取り組み候 歌うも舞うも法の道 さあさあ音頭を始めたたり始めたり」というものである。

また、楽踊りはもともと田植神事に発した田楽踊りから派生し、念仏踊りの要素がかなり混入した芸能と考えられている。山口県にはこの種の踊りが広く伝承されているが、これらは腰輪踊り、花踊り、あるいは「バンバ踊り」と呼ばれている。

ところで、一向宗は中世の日本を席卷した民間念仏信仰集団で、重要な芸能伝播者と考えられる。踊りとの関係で注目されるのは、この一向宗の中に山伏や遍歴の芸能者など、念仏芸能の伝播者が多数含まれ、彼らが踊りの普及に大きな役割を果たしたと考えられる点である。

延岡藩記録『萬覚書』（明治大学所蔵内藤家文書）にある元治元年（1864）7月21日の郡方からの花笠手踊、白太鼓など諸行事に関する届出についての手控には、ばんば踊りが「番場踊」と記されているが、ここで気にかかるのが一向宗の本山「番場蓮花寺」や文明5年（1473）に書かれた



蓮如の『帖外御文』に「夫一向宗と云、時衆方之名なり、一遍・一向是也、其源とは江州ばんばの道場是則一向宗なり」とある「番場」（ばんば）の名称である。念仏踊りはここから全国に波及した。

大分のばんば踊りについて、松岡謙一郎は『安心院の庭入り』<sup>17)</sup>のなかで、「番場時宗の活動と何らかの関連があると考えてさしつかえないであろう」と述べているが、全国各地に伝承される「ばんば踊り」は、おそらく、その発生過程のなかで番場時宗との関わりがあり、今日においてはそれぞれの地域で異なった踊りに変化しているものの、名称はそのレリックとして、現在まで残っていると考えられるのではなかろうか。

## 7. 兵庫口説

延岡の鯛名あるいは北川などでは「ばんば踊り」を「ひょうご」とも呼ぶ。このことから、兵庫＝播州⇒「ばんば」という語源の構図が成り立ったものと思えるが、「ひょうご」とは踊りではなく音頭、口説を意味するもので「兵庫節」ともいう。

「兵庫節」とは「兵庫口説」のことである。これは心中物や物尽くし、浄瑠璃の抜書きなどを七七調の歌詞にした版本で、元禄年間（1688－1704）に流行した大阪の盆踊り唄「糸びや節」の流れを受け、兵庫地域で発展したものと考えられている。享保（1716－35）頃からは「義経千本桜」など浄瑠璃を題材にした「兵庫口説」が大阪の竹本座や豊竹座で宣伝に使われ、大阪を中心に姫路、兵庫、広島で発行された。摂津、播磨地方ではこの「兵庫口説」が盆踊りで盛んに唄われ、西日本一帯へと広まっていった。

大分の佐伯、竹田、玖珠などに「兵庫節」とよばれる踊りがあるが、これは「那須与一」、「白石噺」などを外題としたものである。また、佐伯や延岡の盆踊り口説にある「白瀧姫」、「お染久松」なども兵庫口説を基にしたものと考えられるが、ばんばの口説にみられる「これも新版今流行り出の」（源平一の谷合戦）、「関取千両幟の一巻巻きをお出しくださいお次のお方　さればこれより字に触ります」（関取千両幟）といった前口上からも、口説の基となった版本の存在が窺えるのである。

## 8. 芸態の伝播

城下町延岡は日向灘に面する地理的条件を活かし、阪神地方を中心に交易が盛んに行われていた。木材、木炭、椎茸などを積んで東海港を出航した地元の千石船は、津々浦々を経由して大阪へと向かい反物などを積んで帰港したが、船乗りたちはそこで流行りの浄瑠璃や歌舞伎、踊りなども観たであろうし、立寄った港でさまざまなものを見聞きしたに違いない。

また、19世紀前半の建立とみられる東海町の常夜塔には摂州（大阪北西部、兵庫東南部）、備前（岡山南東部）、藝州（広島西部）、防州（山口東部）、予州（愛媛）といった寄進者の国名が見え、東海寺墓地に地元廻船業河内屋志田治吉が建立した天保8年



写真3：東海の常夜塔

(1837)と嘉永3年(1850)の2基の溺死者供養碑には「藝州 大徳 新屋和平船 住壽丸沖舟 安太郎 水主 慶 同要助 同虎蔵 同半次郎 同力松 甚蔵」、「藝州 大崎 全富丸 船頭水主共七人」の文字が刻まれている。

このことから、東海港には阪神や山陽、四国からも船や船員が出入りしていたことが窺えるが、これは同時に文化が人や物とともにもたらされたであろうことを示している。「ばんば踊り」はこうした流れの中で流行の節や口説を取り入れながら、芸態が成立されていったと考えられる。

今日、阪神地方では新民謡の流行や、生活様式の変化などによって古い盆踊りが廃れ、そのなかでばんば踊りとの繋がりを示すような踊りを見出すことは難しい。しかし、瀬戸内海の島や東京佃島にはそれを窺わせるような踊りが残っている。

瀬戸内海上に位置する愛媛県大洲市青島の盆踊りは、8月14日、15日の両日、氏神の前で夜を徹して演じられた踊りで、近年は、8月13日に賤ヶ岳七本槍(しずがたけしちほんやり)の装束で踊る「大漁踊り」、翌14日に忠臣蔵四十七士の装束で踊る「亡者踊り」が行われている。「大漁踊り」は魚供養のため、「亡者踊り」は先祖供養のために行われるもので、現在は「三つ拍子」という踊りが主流となっているが、「いなおさえ」、「白石踊り」、「きりあい」、「木山踊り」、「笠踊り」、「網曳き」といった踊りも伝えられている。口説は「賤ヶ岳七本槍」、「忠臣蔵」のほか「那須与一」、「石童丸」、「お半長衛門(お半長右衛門)」、「阿波の母恋詩(阿波の鳴門)」、「安珍清姫」、「加賀のお菊」、「鎌倉山」、「お夏清十郎」、「お梅次郎」、「お初徳兵衛」、「あげまき六助」といった外題がある。

無人島であった青島は鯛の好漁場として、寛永16年(1639)播州赤穂坂越村(兵庫県赤穂市)の人々が住み着いたことから、しだいに播州からの移住が増え、この人々によって踊りや口説が伝えられてきたといわれている。この青島盆踊り口説の曲調は素朴で、延岡ばんば音頭の古形態といったものを窺わせる。

この島の故郷である坂越は赤穂市東部に位置し、播磨灘に面する坂越浦に古くから開けた港町で、17世紀には瀬戸内海有数の廻船業の拠点として発展し、西国大名の参勤交代の港としても利用された。内藤充真院道中日記にも江戸から延岡の行き帰りこの港に立寄ったことが記されている。

赤穂では安永8年(1779)の『御用御触書写帳』(栖原村文書)にみられるように尾崎の八幡宮をはじめとする祭礼に関してのお触れがしばしば出されている。<sup>18)</sup>これは祭りのみならず盆踊りについても、質素儉約に努めるべき旨の達しであるが、享和3年(1803)の『御役用諸事控』に坂越では踊りが2ヶ所で行われ取締りを受けたとの記録がある。この踊りがどのような踊りであったかはわからないが、青島への移住が進んだ17世紀には「青島盆踊り」の基となるような踊りが行われていたと考えられている。

「白石踊り」は瀬戸内海に面する岡山県笠岡市の南12キロに位置する白石島に伝わる踊りで「ぶらぶら踊り」、「男踊り」、「女踊り」、「娘踊り」など13種類の踊りが伝わっている。踊りは輪踊りで、唐傘を持った音頭取りと太鼓を囲んで振付や衣装の異なる複数の踊りが同時に踊られる。現在の華やかな衣装は大阪万博出演がきっかけとなったもののようであるが、昭和初期までは刀を差した浪人姿、田植え姿、女性が綿入れを着て男装し男踊りをするなど様々な仮装もみられた。

この踊りは広場だけでなく、旧暦8月14日～16日には供養のために訪問した家の庭で踊っていた。これを「回向踊り」といい、現在は8月15日に公民館前の踊り場に祭壇を組んで行っている。また、かつては「回向踊り」のほか「観音踊り」(17日)、「大師踊り」(20日)、「地藏踊り」(23日)、「八

朔踊り」(30日)と称して、盆の時期には長期間にわたり白石踊りが踊られていた。

口説は「那須与一」、「石童丸」、「丹波与作」、「揚卷六助」、「お半長衛門」、「山田の露(白瀧姫)」など20余りが残っているが、これらは江戸時代、浄瑠璃や歌舞伎の最盛期に島に伝わった兵庫口説を基にしたものと考えられ、最盛期には60を超える口説があったといわれている。

白石島は瀬戸内海沿岸航路の中継地として栄えた島で、踊りは源平水島の合戦の霊を鎮めるため始められたと伝えられるが、その芸態や島の集落形成時期からみて近世以降の成立と考えられる。念仏踊りが形を変えたものともいわれ、曲節は青島のものと同様である。

東京都中央区佃島には幕府の厳しい江戸の治安維持のなかで、唯一伝承を許された盆踊りが残っている。佃島は徳川家康が摂津多田の廟や住吉神社への参詣の折、摂津西成郡佃島村(大阪市西淀川区佃町)の漁師が家康の一行を漁船で渡したのが縁起で、天正年間(1573-91)名主の森孫右衛門以下34人の漁師達がこの地に移り住んだ。あるいは、家康入府の際に兵糧運搬の功により土地と漁業権を与えられたといわれている。これら佃島への初期移住者集団は、本願寺教団の信徒でもあり、佃島への念仏踊りの伝達に重要な役割を果たしたと考えられている。

佃島の人々は総じて西本願寺の信徒であったが、「佃島念仏踊り」とよばれるこの盆踊りは、明暦3年(1657)の大火により移転を余儀なくされた西本願寺が、築地に完成をみた延宝8年(1680)の盂蘭盆に盆踊りを試み、先祖の霊を慰めたのが始まりといわれている。

当時は江戸市中を廻り施物を受け西本願寺に奉納していたが、天保の改革による市中勧化の禁止によりこれを取り止めて、佃島及び周辺の網干場などの空き地で踊るようになり現在に至ったといい、明治までは築地や鉄砲洲でも踊られていた。

江戸市中を廻る勧進の様子は『江戸府内絵本風俗往来』<sup>19)</sup>に次のように記されている。「佃踊りは十三日夜より十五日まで毎夜出づ、これは佃島なる老爺、老婆十人、さては八〜九人一組となり、佃島と書きたる提燈をともし、鉦打ち鳴らし、ヤアトセ、ヤアトセと囃しては念仏を節にて唱えて、京橋より日本橋の辺りを廻る。招く門にて称名(声明)を唱え、鉦うちならして踊るなり。功德の施物若干を受けて、また他の招きに応ず、無邪気にして見るに面白かりし」

この踊り様子は、現在の佃島盆踊りとは異なるようであるが、こうした巡回、訪問型の踊りは、大分の「庭入り」や白石島の「回向踊り」と同様、念仏踊りや盆踊りの古い形態を示している。

佃島盆踊りは、現在、7月13日から15日の夕刻から夜半まで、伝承地である佃1丁目の路上で行われている。輪の中心に組まれた櫓に音頭取りが上り、太鼓を打ちながら七七調の踊唄を唄い、踊り手は櫓を中心に輪になって踊る。口説は秋の草花に添えて現世無情と往生の理を説く念仏唄「秋の七草」、元禄年間(1688-1704)流行した「糸屋娘踊」に由来する数え唄形式の「糸屋の娘」、浄土信仰を勧め、現世安穩を説く数え唄形式の念仏唄「仏供養」、平家物語で有名な白拍子祇王・祇女と仏御前の無常の物語を口説にした「祇王(嵯峨口説)」、地名を読み込み、恋の成就を述べた「村づくし」のほか浄瑠璃や歌舞伎などを基にした「お吉清三」、「日高川安珍清姫」、「石童丸」、「俊徳丸」、「阿波の鳴門」といった外題が伝わっている。

踊りの所作は右足を出したら右手、左足を出したら左手を上げて前後するいわゆるナンバ踊りで、手を軽く拳にし、ゆっくりとした調子で前後しながら、節の切れ目に「アーコラショイ」、「コラ、ヤートセー、ヨーイヤナ、コラショイ」と囃子詞を繰り返し軽く手を打つ。踊りは摂津にいた頃、浄土真宗の門徒講を二分する争いがあり、勝利した鈴木飛騨守側の勝ち名乗り動作を基にしたものといわれ



る。最終日の15日には大人は変装して踊るとものとされ、流行や世相を反映させた化装が行われる。

この佃島盆踊りの曲節は青島や白石島のものと相似しており、抑揚の少ないその踊唄からは「コリャセーノオヤートセー エイヤー東西 暫しの間 アーヤッコラセ」という延岡ばんば音頭の古い姿が見えてくる。

これらの踊りと延岡の「ばんば踊り」との関連については現在のところよくわからない。しかし、青島と播州赤穂、佃島と摂津西成との関係、また、白石島が瀬戸内航路上にあったことを考えれば、その発生・発展過程においてなんらかの繋がりがあったとしても不思議ではない。有馬時代（1614－1693年）には赤穂から延岡に五家族が移住し製塩技術がもたらされているし、東海港には屋号に阪神方面の出所を示す攝津屋、淡路屋といった廻船問屋もあった。

ばんば踊りについては、これから調べなければならぬことも多いが、不十分ながら、今回、これまでの調査を取り敢えずまとめてみることにした。拙稿がいささかなりとも今後の「ばんば踊り」研究と伝承の一助となれば幸いである。

(注)

- 1) 宮崎県文化文教・国際課 「沢武人」『みやざきの百一人』 <http://www.pref.miyazaki.lg.jp>
- 2) 秋山栄雄 (2006)『民族探訪ふるさと365日』(下巻) 鉱脈社
- 3) 年森偵泰 (1978)「ばんば考2」『郷土展望第』(12) 夕刊ポケット新聞社
- 4) 柴田晋一 (1976)「旧ばんば団七踊り考」『郷土展望第』(2) 夕刊ポケット新聞社
- 5) 延岡市教育委員会編 (1998)『延岡市民俗芸能調査報告書』延岡市教育委員会
- 6) 小嶋政一郎編 (1966)『延岡ばんば踊り音頭集』延岡市文化連盟
- 7) 杉本喜好編 (2003)『延岡ばんば音頭集』延岡ばんば音頭保存会
- 8) 木谷俊二編 (1978)『権藤正行師を囲む座談会記録—延岡草分け物語—』延岡市立図書館
- 9) 佐塔豊淑 (1993)『団七踊り 全国探訪十七年』新葉社
- 10) 明治大学博物館編 (2004)「五十三次ねむりの合いの手」『延岡藩主夫人内藤充真院繁子道中日記』(内藤家文書増補・追加目録8) 明治大学博物館
- 11) 日本放送協会編 (1994)『日本民謡大観 九州編 (北部)』日本放送協会
- 12) 福岡県教育庁指導第二部文化課編 (1987)『福岡県の民謡』福岡県教育委員会
- 13) 「小さな親切」運動行橋支部編 (1986)『ふるさと盆口説』小さな親切運動行橋支部
- 14) 歌詞には今日の人権問題に照らし不当な差別語句や不適切と思われる表現もあるが、その成立年代の背景や民俗文化の記録という観点から、あえて原文のまま記載した。
- 15) 綾部市市史編纂委員会 (1976)『綾部市史』(上) 綾部市
- 16) 都節音階」とは、「ずいずいずっころばし」、「お江戸日本橋」などに使われるミファラシドからなる5音階（陰旋法）で近世邦楽に広く用いられた。
- 17) 松岡謙一郎 (1981)「安心院の庭入り」『大分県文化財調査報告書』(55) 大分県教育委員会
- 18) ①安永8年 (1779)『御用御触書写帳』 檜原村文書  
「村々ニ而祭り之節若者共寄り集歌舞妓様之事致候儀は、先達急度停止と被仰付候、然所近頃ニ而はにわか杯と名附候而歌舞妓ニ似寄候事致候村方有之様ニ相聞え不埒之事ニ候、此已後右躰之事致候村於有之候は遂詮議庄屋年寄等迄御咎被仰付候間、左様可被相心得候」



②文政7年（1824）『御触書読渡御請印形帳』

「一 盆中町在踊御歳限中無用事、一 神事仏事共相成丈可致省略候事…（中略）…村々小祭ニ致迄右ニ准諸事質素ニして獅子舞神前斗ニ而為舞可申事」

19) 菊池貫一朗 (2003)『江戸府内絵本風俗往来』青蛙社 ※明治38年刊東陽堂支店刊の複製本

20) 内藤充真院 (1863)『五十三次ねむりの合いの手』（明治大学所蔵内藤家文書）より転載

#### 参考文献

・赤穂市教育委員会生涯学習課「坂越盆踊り」『赤穂市の文化財めぐり』

<http://www3.ocn.ne.jp/~akogishi> 2011.10.5

・愛媛県生涯学習センター「鎮魂と大量祈願①」『えひめの記憶』<http://ilove.manabi-ehime.jp/> 2012.11.12

・愛媛県史編さん委員会 (1985)『愛媛県史 地誌Ⅱ（南予）』愛媛県

・及川稜一 (1994)「白石踊」『民俗芸能一第44回全国民族芸能大会特集』（75）民俗芸能刊行会

・湘南盆踊り研究会 Weblio 盆踊り用語辞典 <http://www.bonodori.net/> 2003.2.14

・角川日本地名大辞典編纂委員会「東京都」1978、「愛媛県」1981、「兵庫県」1988、「岡山県」1989、『門川日本地名大辞典』角川出版社

・神戸市立図書館「兵庫口説」『神戸の本棚第51号 ー神戸ふるさと文庫だよりー』

<http://www.city.kobe.lg.jp> 2009.3.29

・財団法人地域創造（2006-10）「大洲市青島盆踊り」『地域文化資産ポータルサイト』

<http://bunkashisan.ne.jp> 2011.11.7

・佐塔豊淑 (2002)『全国縦断団七踊り』新葉社

・篠原明 (2009)「瀬戸内海の盆踊り」『ふるさとの歴史』（33）坂越歴史研究会

・志村有弘 (1999)「日本の怪奇物語ー班女伝説と累伝説を視座として」『アジア遊学』勉誠出版

・高橋秀雄 (1976)「峯の宿バンバ踊りー熊本県阿蘇高森町」『第26回全国民族芸能大会演目解説』

・高森町史編纂委員会 (1975)『高森町史』（下）高森町史刊行会

・竹内勉 (1983)『民謡のふるさとを行く』音楽の友社

・茶谷十六 (1994)『団七踊りの生命力ー奥州白石噺の系譜とその思想にふれてー』暁烏敏賞入選論文

・増山一成 (2012)『佃島の盆踊ー歴史伝承と踊り唄の記録』佃島盆踊保存会

・東京都中央区編 (1958)『中央区史』東京都中央区

・東京都教育庁社会教育部文化課編 (1982)『東京の民謡』東京都教育庁社会教育部文化課

・長門市文化財保護室「赤崎神社楽踊」『ななび』[www.nanavi.jp/page/detail](http://www.nanavi.jp/page/detail) 2009.1.7

・野島寿三郎編 (1991) 歌舞伎・浄瑠璃外題辞典 日本アソシエーツ

・広島女子大学国語国文学研究室 (1981)『芸備口説き音頭集』上・中・下合冊本 溪水社

・藤田洋 (2008)『歌舞伎の事典』新星出版社

・文化庁「佃島盆踊り」『国指定文化財データベース』<http://bunka.nii.ac.jp> 2012.11.12

・松岡実 (2001)「盆の庭入とバンバ踊り：別府市天間地区」『別府史談』（15）別府史談会

・三室清子 (1980)「民族舞踊の研究ー岡山県久米郡久米南町のバンバ踊りについて」『岡山大学教育学部研究収録』岡山大学教育学部学術研究委員会

- ・村上省吾 (1999) 『兵庫口説』 弓立社
- ・山口県教育委員会編 (2008) 「山口県の民俗芸能」『日本の民俗調査報告書集成 補遺 1』 海路書院

#### 調査協力

行橋市教育委員会教育部文化課 熊本県高森町教育委員会 東京都教育庁地域教育支援部管理課  
延岡市教育委員会文化課 明治大学博物館 木田 玄洋 黒木 重代司 杉本喜好 中原 博 古石 實  
増田 豪 松田 勝則 宮前 功 (氏名は 50 音順 敬称略)

#### 写真提供

延岡市教育委員会文化課